ち讀本は原本の風貌を彷彿たらしむべく極めて入念に植字し、毎一通について讀本一頁解說一頁を見開きの頁に置き、番號によつて別册の寫眞版とも對照し得るやうに工夫してある。文書の長短、解說の繁簡種々であるから、其爲に編輯に於ても、印刷に於ても誠に懇切な苦心が凝らされてゐるのである。これは編者中村直勝先生の厚き經驗と深き親切によらずして出來得べきものでは決してない。この書物が今後文書刊行一典據として、永くその價値を失はないことを私は斷言する。

最初「御先食」の話に餘り夢中であつた私は、今外裝といひ內容といひ、他の多くの類書に比を見ないこの書物を手にして、そこに何かしら相通ふ「多賀神社なればこそ」の感激を隱し得なかつたのであつた。〔林屋辰三郎〕（非賣品）

彙報

史學研究會

大會 十一月二十三日（土）、二十四日（日）の兩日に亙つて、恒例の本會大會は擧行せられた。今左にその大概を摘記する。

第一日は午後一時半より樂友會館講堂に於いて公開講演會を催し、左記の講演があつた。折から新嘗祭のよき日、殊に快晴に惠まれて會する者二百名。

一、支那古文物東方波及に就いて一二の考察　本學教授　梅原　末治氏

一、希臘人の財產觀念についての一考察　東大助教授　村川堅太郎氏

右のうち村川氏の講演は本誌本號に掲載、梅原氏の原稿も追つて本誌に掲載される豫定である。

第二日は見學日として、午前九時より市內栗田口三條青蓮院（正午まで）及び市內岡崎圓勝寺町有隣館（午後四時まで）の兩所の拜觀縱覽を行つた。

青蓮院

朝來空は曇り勝にてやゝ陰霾乍ら、秋深い京洛一日の淸遊には適はしく、まづは絕好の見學日和とて、洛東栗田口青蓮院の見學會場に集ひ來る會員の數は、定刻九時を過る頃より漸く加はつた。

拜觀入入口に設けられた受附を經て、宸殿西面に通り、明治二十六年惜しくも燒失した舊殿の遺品たる狩野壽石筆と云はれる國寶濱松圖襖、或は住吉具慶筆の紙園會山鉾圖板戸等に目を遊ばせつゝ南面に廻れば南庭の白砂の箒目も淸々しく、築地外の木立にも秋色漸く深まりつゝあるを覺える。

九時半を少しく過ぎた頃、宸殿南面東の間にて本學講師東伏見邦英伯の列品解說講演が始まる。伯には今日の見學のためには殊の外御配慮に預り、過日は列品選定のため自身御足勞あり、今日は亦御多忙中にも不拘列品解說を御快諾戴き重ね〳〵の御厚情は感謝の他はない。

叡山三門跡の一として、天台宗中の名刹たる當院が、近衞天皇久安六年、時の天台座主行玄の止雨の恩賞として山上のその住房を以て美福門院御願寺として靑蓮院の號を賜つたを濫觴としつゝ、やがて行玄が營んだ洛東白河の房にも同じ稱を冠したが後山上のは廢絕して山下の當院のみ法燈を傳へたとの由緣を始めとして、鳥羽天皇皇子覺快法親王が行玄の門に入らせ給うて以後皇子の御入室頗る多く寺域も亦極めて廣大にして現今の知恩院の地の如きもその中に包含される程で、里坊も四ヶ所に及び、天台宗の大法の一たる皇室安泰國家鎭護を祈る鐵盛光法の道場として榮えた事に及び、近くは幕末の頃門跡におはした尊融法親王の、今日寺寶古文書類特別拜觀の場にあてられた叢花殿に御起居遊ばされつゝ志士達をも召し寄せられ、國事に御奔走あつたことを說かれ、「實はこの法親王が――この關係がありますため今日の講演は辭退したかつたのでありますが――實は私の祖父に當ります所の久邇宮朝彥親王であります」とはにかまれるあたり、誠に和やかな氣分がかもし出され、時と所と人との調和宜しきを得て今日の催しに適はしい講演ぶりではあつた。

終つて小牧教授より挨拶あり、講演中に益々加はり承りて廊、廊下にまで溢れた會員一同、叢花殿階上の特別展觀場に向ふ。

後櫻町天皇當院御滯留三年間の御學問所たる好文亭を先栽越しに拜するこゝ叢花殿階上東南の間を特別展觀第一室として、床には延文元年九月十日、二品尊圓親王の御病篤きを御見舞遊ばされた延文意に拜する國寶後光嚴天皇宸翰御消息一幅、續いて左方の壁面に靑蓮院殿(尊朝親王か)あてに年頭御祝詞に對する御返簡を假名文に遊ばされた國寶　正親町天皇宸翰御消息二幅、及び國寶陽光院御筆御消息一幅、國寶　後陽成天皇宸翰御消息一幅を拜し、床前より東面の窓際に設けた机上には、國寶　伏見天皇宸翰寶篋印陀羅尼經一卷、國寶　後崇光院御筆新續古今和歌集卷下一帖、國寶　後櫻町天皇宸翰心經百九卷一卷、國寶　後櫻町天皇宸翰六字名號一卷、國寶　光格天皇宸翰大灌頂光明眞言一卷、孝明天皇宸翰尊融親王御法名書一紙が拜展せられ、尊き御宸翰御筆のかくも多數を一室に拜し得ること皇室と當院との御關係の深さの今更乍ら思はれて畏い。

第一室南側より西隣なる第二室、第三室に亙つては、台密十三流中最も法脈の繁延した皇慶の各流の正統を繼承して當院に傳はる三昧流の祕奧たる聖教類が展べられた。就中後鳥羽天皇の御時

より永く勅封を加へられた二九一箱をも特に開いてこの箱の由緒を物語る永承三年七月二十三日の皇慶目署をもつ各眞言目錄卷上、尊圓親王御筆二九一箱目錄一卷を始めとして印信類を納める沈金彫箱一合、(箱蓋裏の銘により元の延祐二年、花園天皇正和二年の製作年時が明らかである)安然自筆自稿と傳へる大般若經理趣分私記卷下一卷、奥書の元慶五年七月二十日を去る事遠からぬ書寫と思はれる比叡山延暦寺元初祖師行業記一卷のほか本來二九一箱に納められたものとは思へぬ乍ら寛治頃の書寫或は校合に成り書寫年代の明らかな古鈔本として貴重な傳教大師請來目錄以下十帖の請來目錄祕錄類が出陳され、また平安時代諸學匠の手に成る聖教類を百餘合拜して天台教學の寶庫たる當院吉水藏の一端として承平四年九月十九日再校の奥書ある金剛界智蓮華記一帖、この傳來の上に延喜頃の日支文化交渉の一面を示す燦盛光經一帖、承元三年六月西山草庵にて書寫の奥書をもち慈圓の著かと思はれる無題抄一帖等が選ばれてゐた。

その他奈良時代の書寫と覺しい國寶法華經化城喩品一卷、國寶涅槃經集解一卷、鎌倉後期の寫本たる國寶別異弘願性戒鈔一帖があり、また慈鎭和尚の自筆を推定せられ殊に第四通は愚管抄の稿本とも見られて夙に著名なる國寶の消息斷簡七通一卷が第三室北側の窓際に陳べられてゐた。更に當院修法の史料集たる門葉記百八十四卷中より二卷が開展せられ、中にもその一卷は尊圓親王御自筆にかゝるもの、第二室の目錄を併せて、我國書道史上の一大家に在す親王の御力倆をも拜する事が出來る事に於ても貴重なものと思はれた。

この尊圓親王の後にも當院代々の門跡には能書輩出した事は所謂青蓮院流の名の所以で、入木道關係の典籍の當院に多く藏せらるゝは勿論乍ら、出陳せられた伊經書之と頭書と文明元年感得の奥書とを有して鎌倉時代の書寫と認められる夜鶴庭訓抄一帖は、群書類從本と比して、文體も根本的に相違し、記事も詳密且正しく、誤字誤寫の所々にある事よりしても伊經自筆とは思へぬ乍らもそれを遠からぬ頃のものと覺えて貴重なる古寫本であり、同時出陳の右筆條々一帖及び大手鑑と共に流石は青蓮院と思はしめるものであつた。

この會場のやゝ手狹で、多數會員の一時に入場したため少しく混雜を來した恨はさる事乍ら、採光の具合は理想的に近く、窓外の秋色と相まつて誠に快い展觀であつた。

更に休憩所にあてられた叢花殿階下の一隅にさりげなく立てられた二枚折屏風の貼り交ぜにまでも、後櫻町天皇宸翰心經を拜し藤原行成の筆蹟の模と思はれる萬壽四年八月十六日按察使某の願文を見るなど、又しても當院の由緒がしのばれるのであつた。

青蓮院特別拜觀目錄

國寶	濱松圖襖	十七面
國寶	伏見天皇宸翰寶篋印陀羅尼經	一卷
國寶	後光嚴天皇宸翰御消息	一幅
國寶	後崇光院御筆新續古今和歌集卷下	一帖

國寶　正親町天皇宸翰御消息　一幅
國寶　陽光院御筆御消息　一幅
國寶　後陽成天皇宸翰御消息　一幅
國寶　後櫻町天皇宸翰心經百九卷　一卷
國寶　後櫻町天皇宸翰六字名號　一卷
國寶　光格天皇宸翰大灌頂光明眞言　一卷
孝明天皇宸翰尊應親王御法名書　一紙
沈金彫箱　一合
尊圓親王御筆二九一箱目錄　一卷
皇慶附法狀　一通
谷眞言目錄卷上　一卷
大般若經理趣分私記卷下　一卷
比叡山延曆寺元初祖師行業記　一卷
尊圓親王御筆二九一箱勅封御手書　一紙
傳敎大師請來目錄　一帖
弘法大師請來目錄　一帖
常曉和尙請來目錄　一帖
圓行和尙請來目錄　一帖
惠運律師書目錄　一帖
慈覺大師入唐新求聖敎目錄　一帖
智證大師求法目錄　一帖
宗叡和尙新書寫請來法門等目錄　一帖
禪林寺宗叡僧正入藏眞言法文都錄　一帖
八家祕錄　一帖
金剛界智蓮華記　一帖
蠟盛光經　一帖
無題抄　一帖
六種曼荼羅略釋　二帖
國寶　法華經化城喩品　一卷
國寶　涅槃經集解　一卷
國寶　別異弘願性戒鈔　一帖
國寶　慈鎭和尙消息　七通一卷
門葉記　百八十四卷
夜鶴庭訓抄　一帖
右筆條々　一帖
大手鑑　一帖
以　上

有隣館　一方有隣館に於いては第一、第二の兩館を開放して蒐藏の東洋古美術品の夥しき展觀をはじめ、特にこの日支那歷代の古名筆數十點を出陳して頂けたことはかへすがへすも感激に堪へぬところであり、數多の逸品佳什に眼を奪はれ、暮れ易き秋の一日を惜しみつゝこの意義深き一日の見學に大きな感銘を覺えたのであつた。

終りに靑蓮院並びに有隣館の御好意に對して厚く感謝の意を表する次第である。

文學部陳列館の公開

紀元二千六百年を奉祝すべく本學に於いては十一月十七日學内を開放し一般市民に公開したが、文學部は陳列館の開放をなし、次の如き展觀を行ひ、多數の參觀者に賑つた。

國史研究室　陳列を四部に頒つて史料の特別展觀を行つた。

第一部は神典及び其註釋書と題して本學圖書館所藏の日本書紀神武紀神代卷（慶長勅版）一册を始め白石正邦氏所藏の日本書紀神武紀（谷川士清書入本）一册以下書紀神代卷並神武紀の註釋書・新撰姓氏錄等を陳列した。

第二部は神事並に民間行事資料とし、春日若宮祭・東大寺修二月會・近江八幡神社左義長祭禮其他諸社の民間信仰資料並に田樂關係の文獻及繪卷物を展示し、

第三部皇室御系譜と山陵の室には長谷場純敬氏所藏の本朝皇胤紹運錄（甘露寺親長奥書）一卷以下皇代記・皇年代記等の皇室御系圖類及び山陵記・御陵考・御陵繪圖等を收めて最も盛觀を呈し、最後に

第四部は古代に關する諸研究の資料を蒐集して六國史の寫本・刊本、羅山・白石・光圀等の著書・書狀・肖像等を掲げた。猶第二部の展觀に因み別室に於いて最近國史研究室の調査編修に係る近畿諸地方の現存神事田樂のフィルムを上映して一般の興味を喚起するところがあつた。

東洋史研究室　陳列を三部となし、第一部「西域發見資料及び其關係書類」に於いては、佛名經卷第七以下の原典四種、回鶻文天地八陽神呪經以下十九種の原典寫眞、流沙墜簡以下二十二種の原典遂錄類その他研究論著及び探檢旅行記多數を、また

第二部「佛印特に安南に關する史籍及び遺物」に於いては安南文字を含める大南國史演歌以下七種、漢字にて書かれし大南實錄以下三種の安南出版書類、清光緒朝中法交涉史料以下二十五種の外交資料、皇明職方圖等の明清時代安南事情書類、その他研究調査書及び遺蹟寫眞遺物を陳列し、

第三部として「邊代當后陵の壁畫及び寫眞」を陳列した。

西洋史研究室　ヘロドトス以下古代ギリシヤより十九世紀に至るまでの西歐の優れたる歴史家三十餘人及び本學物故原勝郎・坂口昂・植村清之助・中村善太郎先生の肖像寫眞及主要著作百餘點を展觀し、別に歐洲史蹟の天然色幻燈の映寫を行つた。

地理學研究室・考古學研究室　常設の陳列室の開放を行ひ、尙考古學研究室に於ては教室發刊の報告書並に圖錄の陳列があつた。

地理學談話會

例　會　九月二十八日午後二時半於地理學實習室、出席者二十五名。

一、北海道旅行報告　堀川　侃

一、花蓮港築港　光田　光二

一、皇民化運動　戸川　俊正

一、關　　柴田　孝夫

例　會　十月二十八日午後七時於地理學實習室、出席者三十二名。

一、現下の南洋を語る　　川上　健三

例　會　十一月三十日午後二時半於地理學實習室、出席者二十五名。

一、植民に關する二三の考察　　戸川　俊正

一、アラビヤの石油資源　　藤野　義明

地理學教室秋期旅行

本年の二回生の實習旅行は十月二十五日より二十八日迄に亙つて若狹國三方郡を中心として行はれた。研究題目は「海外移民」であつて、此の地方のアメリカ移民に對して、メスを加へ、新らしい滿洲移民政策に對する暗示を得て來た「健全なる移民は健全なる農村より」と云ふテーゼは簡單明瞭なものではあらうが、机上で、數字を基礎として移民政策を論せんとする人々に、何等かの參考となるであらう。（川上記）

考古學談話會

秋季例會　十一月九日（土曜）午後一時より陳列館第二教室にて開催、梅原教授、村田講師以下二十名に近い出席を得て左記の講演があり盛會であつた。

一、應縣旅行記　　文學士　岡崎卯一氏

今夏北支旅行に際して踏査した應縣に於ける遺跡のうち漢瓦を出した古の繁峙縣治址と想定される東張寨の土城の實際に就いて說明を試み、同時に右の採集の古瓦其他を展觀した。

二、南京雨花台古墳　　文學士　岡田芳三郎氏

去る五月、南京にて調査された雨花台古墳の發掘の狀況並びに遺跡遺物に就いて詳細にかたられて其の古墳構造の特色を擧げ出土の遺物を吟味する所あり、それ等から造營年代は上限が漢代、下限が隋代でほゞ六朝に置き得るものがあるとした。

三、陸前貝塚瞥見　　文學士　藤岡謙二郎氏

五月上旬、慶應大學の大山柏氏に從ひ、陸前諸貝塚を見學せられた際の調査見聞談を加味した陸前諸貝塚に對する感想談である。龜ヶ岡式注口土器のうちに獨生式的な意匠を持つもの、或は一般屈葬人骨のある事等から、これらの遺跡と雖ども他と時間的には異らず、而かもなほ東北地方特有な文化を作り出したことに就いて論ずる所があつた。

四、朝鮮旅行雜感　　教授文學博士　梅原末治氏

十月十三日より十日間に亙る教室員の朝鮮見學旅行（別項參照）に就いての感想を說かれた。中で特に興味あつたのは平壤附近の土地開發により出土した北方系の金具類で、是等から樂浪文化以前に此の地に、支那文化に北方系文物の加味されたものがあつて、これが史に傳へる衞滿朝鮮に當つべきであらうとした。（鹽田）

考古學教室秋期朝鮮旅行

考古學教室では梅原教授指導の下に、助手、副手、大學院學生、學生等六名が昭和十五年度運動週間を利用して、半島の主要なる考古學的見學旅行を行つた。即ち十月十三日早朝釜山に上陸してより廿日の午後扶餘を出發して歸途につくまでの八日間に慶州、平壤、京城、公州、扶餘の順で樂浪から三國鼎立時代を中心とした古朝鮮の遺物、遺跡の主なものに親しく接し得たのであつた。

先づ新羅の古都慶州にては著名な佛國寺並びに石窟庵に詣で、風光絶佳の佛國寺ホテルに一泊の上翌日は掛陵からはじめて慶州邑内外の諸遺跡と博物館分館の見學に費した。佛國寺は廻廊、講堂等は今はたゞ礎石をとゞむるのみであるが、入口の大石壇の前に虹の如く架けられた美しい石橋を渡つて、紫霞門をくぐれば、西端に泛影樓が美しく殘存し、又シンメトリカルに巧致を極めた多寶塔が相並んで新羅の石造美術の美しさを如實に示して、見る者の感激を強めるものがあつた。石窟庵は佛國寺から東約卅丁の山道を登つて達するが山腹に營まれた大洞窟の中には釋迦如來の大石像が安置され、その周壁には觀音其他の浮彫像がめぐらされて、佛國寺と共に盛唐さながらの美術を示現してゐる。慶州では太宗武烈王陵、南山の三體佛、石氷庫、鮑石亭等の跡を見、芬皇寺では美しい甎で積れた多層塔をながめた。これらは、かの文武の石人並びに石獸の立てられた掛陵と共に深い印象をとゞめた。慶州博物館では折よく大正十五年發掘の瑞鳳塚遺物が特別陳列中で、その稀有な遺品を一々觀賞する機會を持つ事を得た。慶州から一行は直ちに平壤へと直行したのであるが、途中大邱では白神氏の案内を得て同市小倉氏の蒐集に係る石舍利塔や古新羅時代の遺物群を一覽する事が出來た。漢代の半島文化の中心であり、兼て亦高句麗後半の首都たりし平壤では先づ府立博物館を訪ふて、小泉館長の案内の下に自由に館内の陳列品を見學した。多くの樂浪古墳出土品、高句麗古墳の壁畫の模寫の他に、なほ古い所では美林里その他出土の石器時代遺物特に多頭環狀石斧や、櫛目紋系土器等注意すべきもの多く、亦反川里出土の双鈕細紋鏡、孟山郡出土の同鏡笵、更に平壤附近出土の從來知られたものより、より古い北方的な文化樣相をもつた小形鐸、竿頭形銅製金具、轅用金具、一般馬具類等の一括遺物に新たな興味を覺えた。その午後は一同大同江畔に樂浪古墳、同都城址を見學し、その一部に建てられた關野博士永思之碑に博士の功業を偲んだ。十六日は高句麗の壁畫古墳の見學に終日を費した。江西の三墓里に見た壁畫の美しさは、その持送り式天井の結構と共に、六朝美術の優雅さを味はしめるに充分であり、就中四壁に描かれた四神の姿は、羨道から入り込む太陽の光を受けて、如何にも躍動せる如く感じられた。午後は眞池洞の雙楹塚を訪れたが、その室内の八角の柱の奇妙さに驚かされた。かくて附近石泉山の支石墓(ドルメン)を見て平壤に歸つた一行は同地柴田鈴三氏蒐集の金石併用期から樂浪時代に亙る豐富な遺物類を見る事を得て、最も印象深い一日を過したのであつた。京城では滯在の二日をば李王職博物館と總督府博物館との見學に費した。特に後者にては樋本、澤爾氏並びに先輩有光氏の厚意に依つて、それに收藏された豐富な遺物類を親しく見學

し得た事を感謝せねばならない。慶州の博物館分館庭で見たと同様な種々の石造美術品、就中石佛、石塔等がその廣い庭に散在してゐて、時代的に觀賞し得たのを始め、こゝでは鳥居博士以來調査されて來た全鮮の石器時代の遺物、慶州の古墳から出た各種の黄金製裝飾品、全南潘南面出土の陶製甕棺及びその出土品類、大谷光瑞氏將來の西域の遺物類等が中で注意を惹いた二三のものである。なほ折から同館でも本年度樂浪發掘品の特別陳列の準備中であつたので、それらをも觀る機會にめぐまれた。十九日朝京城を後に南下、鳥致院で下車して公州へ向ふ。新設の公州博物館に於ける陳列品はなほ目星しいものに乏しい感はあつたが、大通寺の石槽が移されてをり、また單辨の我國のものに似た瓦や、古墳出土の金製品等が注意を惹き、次いで訪れた宋山里のアーチ形築墳は、その壁に描かれた四神の圖なり、其の架構や排水溝の作りに特殊な興味を覺えた。その夕刻到着した扶餘では城大の藤田教授が待ち受けられてゐて、同氏から指導を受ける幸福を持つた。我國に佛教並びに飛鳥文化の或者を傳へたこの百濟の舊都は、今や秋たけなはにして、この旅行の終りに適はしい最後の一日を過ごす事を得た。博物館の遺物に收められた數々の美しい瓦もさる事乍ら、切石の天井に描かれた王陵壁畫の美はしさ、五層の整然たる石組をした平濟塔の氣高さ、山城址附近から見下した鏡江の形勝等何れも忘るる事の出來ない印象をあたへた。かくて廿日の午後一時前論山に向ふバスで扶餘を辭して歸途に就いたのである。（藤岡）

西洋史讀書會

例　會　昭和十五年九月卅日、午後六時より於樂友會館、本年度第三回例會を開催、原教授、村田、井上、前川の三講師を始め參會者二十六名。

一、Kliutchevskii: Geschichte Russlands　　二回生　河村　盛一君

一、莊園の構造について　　鈴木　成高氏

大　會　皇紀二千六百年の佳き歳、而も菊花馥郁たる明治節の佳き日我が西洋史讀書會第八回大會は開催されたのであつた。今や我が國は内外共に曠古の非常時に際會し、明治維新に比すべき昭和維新が翹望され、國を擧げて新體制樹立に邁進する折柄、獨り學問のみ歴史的現實より遊離して存在し得る筈はない。我が學會に於ても本年は原先生が夢頭、在來ありし如き御座なりの開會の辭に代ふるに「明日の歴史學」なる表題の下に危機に瀕する歴史主義超克の問題を投ぜられたが、引き續き學會は眞劍なる雰圍氣の中に續行せられ漸く夕闇迫る六時過ぎ意義深き講演會の幕は閉ぢられたのである。遠く仙臺、東京、廣島、九州よりはるばる來會を見、參會者總數五十六名と云ふ盛況であつた。引き續き晩餐會、懇談會に移り原先生司會の下に、東京帝大の三浦氏、東北帝大の祇園寺氏、廣島文理大の金子氏、當方からは安藤、鈴木兩先生より夫々御話あり一同和かな談笑に九時頃散會した。

猶講演會の司會は村田、井上兩先生に御願ひした。

（當日の出席者講演會五十六名、晩餐會二十七名）

講演の内容大體左の如し。

明日の歴史學＝挨拶に代へて　原　隨園先生

中世後期の社會　辻本　倉雄君

Karl Bücher は、其の著、“Die Entstehung der Volkswirtschaft”に於て（S. 126）、中世の Fernhandelswaren として五つの商品目録を擧げて居る。

① Gewürze und Südfrüchte.
② Getrocknete und gesalzene Fische.
③ Pelz.
④ Feine Tücher
⑤ Salz und Wein

併し乍ら、この商品目録は、嚴密な史料に依れば、不充分である。例へば、フランダースとドイツとの遠距離商業を考察してみるに、ドイツからの輸出品は約百五十品目、輸入品は約百品目も數へられる。又、今一歩を讓歩して、經濟學者のなした意識的な抽象であると考へても、そこに重要な商品が省かれて居る缺陷がある。

それが故に、中世後期の社會とは、Bücher の意味するが如き、都市と其の週邊との結合した Geschlossene な地域の分散狀態ではないと考へられる。この點に於て、Bücher の Stadtwirtschaftstheorie を否定して、Fernhandel の意義を强調した Fritz Rörig の說は、多くの暗示を含んで居るものと思ふ。

一七八六年の英佛通商條約の意義　豐田　堯君

近く史林に論文として掲載の筈。

政治史に於ける「國家」把握　中山　治一君

一、特にフランス及びイギリスに於てその代表者を見出すところの自然法的國家把握。

二、近代國家の成立が年代的に最もおくれたドイツに於いてその代表者をもつところの歴史主義的思惟方法による國家把握。

三、ヘーゲル及びそのエピゴーネンに於ける「國家」と「社會」の問題。

四、「社會」の觀點から「國家」を把握しやうとする「ドイツ社會學派」に對して歴史主義的「國家」把握を防衛しやうとする所謂「政治史學派」特にトライチュケの「國家」把握。

民族主義と愛國主義　西井　克己君

Reden an die Deutsche Nation に於て、特に明瞭に看取し得られる Fichte の國家思想、國民意識が、Nationalismus を指導理念とせるものであるとは、Treitschke, Windelband を初め今日迄學者の多く主張せる處であつた。

然し、彼の所說を些細に考察するならば、私は Meinecke と共に、彼が依然として Kosmopolit であつた事實を否む譯には不可ない。

然らば、其にも不拘、吾々が尙認めざるを得ない彼の國家思想に見られる national なものは如何に理解せられるのであるか。

私は其を、獨逸未曾有の國難に遭遇せる彼の Patriotismus の

發露であるとしたい。何となれば、Nationalismus は Volkswirtschaft 成立と同時に初めて具體性を有つに至れる正に近世に固有な歴史事象であり、而も Fichte の時代には Pohle や Sombart の謂ふ如く Volkswirtschaft は未だ成立してはゐなかつた。然し Patriotismus は歴史を越えた歴史現象と表れ得るものであるからである。

吾々が national なものを有つ事を以て直ちに其が Nationalismus に立脚せるものであると往々即斷し易いのは、Nationalismus を歴史概念として把握しないが爲である。換言すれば、歴史概念たる Nationalismus と、超歴史概念たる Patriotismus との混同にあるからであつて、Fichte 理解に際しても、斯る概念規定の曖昧さは常に戒心せられねばならぬ處のものであると考へられる。

而して是は、今後私が試みんとする獨逸民族主義運動研究の序をなすものである。

後使徒時代の異邦基督教に於ける二潮流　辻村正吾君

原始基督教の發展は複雜なるもので、チュービンゲン學派の考へた、ペテロのユダヤ的基督教とパウロの異邦的基督教の綜合がカトリク教會の成立である、と云つた樣な單純なものでない事は今日明かになつた。紀元七〇年にエルサレムが滅亡してユダヤ的基督教が衰亡に向つた頃から約五十年程の間はカトリク教會發生の前階段とも云ふべき時代で、重大な發展が異邦的基督教の内部に行はれつゝあつた時代であるが、遺憾乍ら教會史の中では最も暗黑な時代でその詳細なる發展狀態は初期の使徒時代よりもむしろ究め難い。我々は此時代を使徒達の教を受けたと考へらるゝ所謂使徒教父達(Apostolische Väter)の活動した時代として後使徒時代 (Nachapostolische Zeit) と呼ぶ。私は此時期に書かれた文書の中から二つ――「第一クレメンス書簡」と「ヘブル人への書」――を選んで、當時の複雜な潮流の中に非パウロ型とパウロ型の發展を認め得る事を見、それらが由來する所を檢討し、更にそれらがカトリク教會成立に關係する點を考へて見度いと思ふ。

英獨關係におけるハルデイン交渉の意味　安藤俊雄君

ハルデイン交渉(一九一二年自二月八日―至二月十日)は非公式會談の形式をとりながらアガヂル事件直後の險惡なる形勢、協商對同盟の對抗、英對獨の緊張緩和の端緒を摑むの重大使命を以て行はれたり。問題の中心は、(一)海軍協定、即ち英の對獨海軍優勢保持、殊に當面の獨逸新擴張計畫豫算案の取止め要求、(二)英の中立保障、即ち將來大陸戰爭における英の中立につき獨は好意的又は絶對中立を求め、英は非挑發戰に限りこを約せんとす、(三)植民地協定、阿弗利加波斯灣岸における兩國勢力圏鐵道利權に關する妥協、以上三點に歸す。

この重要交渉に臨む兩國政府の用意に差異あり、英は非公式交渉にて獨の眞意を打診せむとするに對し、獨側はこに正式交渉同樣の成果を期待したり。獨は懇請する新擴張計畫豫算案取止めに應ぜず、英は獨の要求するが如き方式の中立保障を拒み交渉不調に終る。然れども獨は英の消極的態度に不拘、駐英大使を督勵し

正式交渉を始め積極的活動をなしたるも、獨宰相ベトマン及外務當局が新擴張豫算案を讓りてまでも英の中立保障を獲むとするに反し獨海相ティルピッは擴張原案を固執讓らず、獨帝この外交不統一を苦慮しながら自ら宰相の與り知らざる强硬訓令を駐英大使に宛つるなど、獨の外交陣は焦躁支離滅裂に陷る。之に反し英外交は整然として間隙を與へず、一方佛側の躍起運動を冷かに抑へつゝ獨の求むる中立保障拒絶の理由を協商義務遂行に藉口し、巧妙に對獨行動の自由を確保したり。一九一四年大戰勃發直前英獨交渉に於て兩者之と類似の立場に在り、七月廿九日英の中立に關しグレーの發せる重大警告に接し狼狽せる獨當局が對佛宣戰の猶豫、白國中立尊重を提議し以て英の中立を買はむと焦慮して能はざりしは二年前對英外交失敗の轍をふめるものといふべし。

閉會の辭

例　會　昭和十五年十一月二十八日午後六時より於樂友會館、第四回例會を開催、原教授、村田、井上、前川の三講師を始め參會者二十三名。

一、Frederick, J. Teggart; Theory of History　二回生　廉　殷　鉉君

一、Fustel de Coulanges: La cité Antique　二回生　古橋　直樹君

東洋史談話會

例　會　今學期は主として二回生諸君が中心となり、元氣潑剌たる發表を行つた。

十月二十六日(土)午後一時樂友會館に於て

都市問題の回顧　二回生　長谷川一郎

偶　感　宮崎助教授

十一月二十日(水)午後六時半樂友會館に於て

支那の農村　二回生　藤田　國雄

滿洲史について　二回生　岡崎　精郎

十一月三十日(土)午後六時半樂友會館に於て

周氏の謎について　二回生　山口格太郎

支那宗教史の諸研究　二回生　善峰　憲雄

故陸軍大尉龜川正信君追悼會　昭和十一年史學科東洋史卒業、元副手龜川正信君は、昭和十三年七月以來○隊長として北支の山野に轉戰したが、去る九月二十日、○○省○縣に於いて頑敵討伐中壯烈な戰死を遂げられたので、同學諸士の發議により、十一月二十二日(金)午後三時より、百萬遍山内了蓮寺に於て追悼會を開催した。支那佛教史學專攻の同君が特に崇拜してゐた先輩塚本善隆氏導師となり、讀經の聲もしめやかに、談話會代表那波利貞教授祭詞をさゝぐれば滿座肅然たり。參列者一同の燒香を終つて追懷談に時の移るを忘れ、六時散會。遺族をはじめ、羽田總長、史學各科教官、卒業生、學生等多數の參列者あり、盛儀であつた。

東方文化研究所

公開講演　秋季に入り左記公開講演が行はれた。會場はすべて

同所講堂。

十月十二日(土)午後一時半

佛教に於ける譬喩の諸相　長尾　雅人

近代支那の性格　吉川幸次郎

十月二十六日(土)午後一時半

敦煌出土の曆について　藪内　清

十一月十六日(土)午後一時より

(開所記念公開講演)

古代支那の藥術的類型　長廣　敏雄

支那に於ける刑法の起原　小島　祐馬

世親の心、心所說　結城　令聞

なほ當日は前漢霍去病墓飾畫像、北魏拓本、宋代石刻地圖、新得善本等を展觀した。

十一月三十日(土)午後一時半

崑曲の大家俞粟廬の唱片演奏　青木正兒解說

支那學會

大會　十一月二十四日(日)午後二時樂友會館に於て

朱子に於ける習慣の問題　安田　二郎

唐詩の助辭に就いて　豐田　穣

殷代文化の二元性　小川　茂樹

伯仲叔季に就いて　常盤井賢十

支那小說論　吉川幸次郎

遺物に見らるる支那佛教の性格　塚本　善隆

本學月曜講義

十月二十三、五日午後七時より法經第一教室に於て

東西文化の交流　總長　羽田　亨

十一月四、十八、二十四日午後七時より同所に於て

康有爲より孫文まで　(文學部)教授　小島　祐馬

會報

會員動靜

入會

京都市左京區田中大堰町三ノ一　加畑　一夫氏

福井縣小濱町板屋町　田中　勝藏氏

京都市上京區大將軍鷹司町一　及川　幸夫氏

愛媛縣立松山商業學校　足立　修平氏

(右内田吟風氏紹介)

大分市中島二條　堀　雄夫氏

奈良縣吉野郡川上村縣立吉野林業學校内　吉川　潔氏

(以上豐田堯氏紹介)

神戸市灘區上野通七ノ四六　山本　隆義氏

(右外山寅治氏紹介)

東京市麻布區三河臺十三　藏內修治氏
京都市左京區松ヶ崎東町七　大野健彦氏
（以上藤岡謙二郎氏紹介）

轉居

岡崎市明大寺町宮ノ圦一四ノ一　平山久氏

寄贈交換圖書（十二月現在）

中央文化研究會報四・五　同會
中谷政一著　日羅の感覺　著者
皇紀二千六百年記念國史善本展覽會目錄　大阪府立圖書館
菅沼貞風著　大日本商業史　同遺著刊行會
中國文學　六五・六六　中國文學研究會
歷史と國文學　二三ノ四・五　太洋社
蒙古　七ノ一一・一二　善隣協會
基督教史研究　九　基督教史研究會
斯道文庫報　三　斯道文庫
史學雜誌　五一ノ一〇・一一　史學會
歷史地理　七六ノ四・五・六　日本歷史地理學會
社會經濟史學　一〇ノ七・八　社會經濟史學會
史學研究　一二ノ二　廣島史學研究會
人類學雜誌　五五ノ九・一〇　東京人類學會
考古學雜誌　三〇ノ一〇・一一　考古學會
文化　七ノ一〇・一一　東北帝大文化會
國學院雜誌　四六ノ一〇・一一・一二　國學院大學
史迹と美術　一一ノ一〇・一一　史迹・美術同攷會
社會學徒　一四ノ一〇・一一　社會學徒社
史淵　二四　九大史學會
臺大文學　五ノ四・五　臺北帝大文學會
國民精神文化　六ノ一〇・一一　國民精神文化研究所
民族學研究　六ノ三　日本民族學會
西洋史研究　一五　西洋史研究會
商業と經濟　二一ノ一・二　長崎高商研究館
哲學研究　二五ノ一〇・一一　京都哲學會

昭和十五年度會計報告（自昭和十四年十一月至昭和十五年十月）

總收入　一、三七九・三九

內譯
前年度繰越金　七二九・八七
印税　六四〇・〇〇
利子其の他雜收入　九・五二

總支出　七二五・九三

內譯
大會費　二〇四・三八
例會費　五五・〇七
役員手當　一八一・四〇
執筆者謝禮　二六五・一〇
會務費　一九・九八

差引殘高　六五三・四六
（明年度へ繰越）以上